

■第2部会 ③

獣害・運・種の保全と燃料利用を合わせた里山管理

滋賀県立大学環境科学部 野間直彦

●里山林の未来 生物の多様性保全 ー共通認識完成ー

伐って管理するにはエネルギー利用がよい←温暖化、自然エネルギー

●滋賀県と、県内のいくつかの自治体「地域新エネルギービジョン」などの計画

どうやって木質エネルギー利用を始める？ コスト高いー燃料単独では無理

●雑木林・植林も含めた森林の「多面的価値」の積極評価 里山利用は合わせ技で

資源、水源・水質保全、土壌保持・・・(古典的機能)

生物多様性保全、鳥獣害防止、生活文化、遊び、教育、福祉・・・(新しい機能)

●滋賀県ニホンザル保護管理計画 「生息環境の保全」

農地と山の境界管理 (姿を見られず耕地に直行できる今の状態は獣害をひどくする)

針広混交林に誘導、植林の間伐・二次林管理

●イノシシによる農業被害の増加

森林に生息、緩やかな丘陵地を好む【林縁部や農地周辺に現れやすい】

夜行性は人間活動による二次的な現象【人間の活動を避けている】

滋賀県湖北地方：針葉樹植林をよく利用【他地域と異なり針葉樹植林の利用が多い】

「昔は今ほど出なかった」【里山の利用のしかたが違っている】

●かつての里山の利用

集落の裏山や耕地の周りの山には木が少なかったー人と獣の緩衝地帯があった

低い、まばらな植生【隠れ場なし】 恒常的な人の利用 (立ち入り)【忌避】

●そこで、未間伐植林・暗い二次林・藪となっている林地を伐採・利用

農地と、イノシシやサルの生息場所との緩衝地帯としての機能を回復させる

伐った木は農道があるので搬出しやすい

●課題

農業・林業の補助金利用-近隣でまとめる 継続した利用・管理

プロフィール

野間 直彦

(のま なおひこ)

1965年千葉県生まれ。

京都大学大学院理学研究科博士後期課程（植物学専攻）修了。

熊本にある森林総合研究所九州支所勤務などを経て1998年から滋賀県立大学講師

(環境科学部環境生態学科)。

屋久島などで動物による種子散布の生態を研究してきた。

最近、里山の生物の現状を調べ、木質バイオマス利用を含めたその保全策を考えている。

E-mail: noma@ses.usp.ac.jp